

日蓮大聖人御書全集

べんどのならびにあまごぜんごしよ

弁殿並 尼御前御書

新版
1635

べんどのならびにあまごぜんごしよ

弁殿並 尼御前御書

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

につしやう

あまごぜん

文永10年('73)

9月19日

52歳

日昭ならびに尼御前

さだとう

じゆうにねん

破

まさかど

はちねん

傾

貞任は十二年にやぶれぬ。

将門は八年にかたぶきぬ。

だいろくてん

まおう

じゆうぐん

戦

起

ほけきやう

ぎやうじや

第六天の魔王、十軍のいくさをおこして、法華經の行者と

しやうじかい

かいちゆう

どうごえど

取

奪

生死海の海中にして、同居穢土を、とられじ、うばわんと

争

にちれん

み

相当

たいへい

起

あらそう。日蓮その身にあいあたりて、大兵をおこして

にじゆうよねん

にちれん

いちど

退

こころ

二十余年なり。日蓮、一度もしりぞく心なし。しかりとい

でしとう

だんなとう

なか

おくびやう

者

だいたい

えども、弟子等・檀那等の中に、臆病のもの、大体あるい

落

たいてん

こころ

あま御前

いちもんふつう

はおち、あるいは退転の心あり。尼ごぜんの一文不通の

しようしん

退

たま

もう

小心に、いままでしりぞかせ給わぬこと、申すばかりなし。

うえ

じしん

使

げにん

ひとり付

その上、自身のつかうべきところに、下人を一人つけられ

そうろう

さだ

しゃか

たほう

じつぼうふんじん

しよぶつ

ごちけん

て候こと、定めて釈迦・多宝・十方分身の諸仏も御知見あ

きようきようきんげん

るか。恐々謹言。

くがつじゅうくにち

にちれん

かおう

九月十九日

日蓮

花押

べんどの

あまごぜん

もう

たま

弁殿、尼御前に申させ給え。

繁

止

べんどの

もう

だいしこう

しげければとどむ。弁殿に申す。大師講をおこなうべ

だいし

そうろう

さぶろうざえものじようどの

そうろうふみ

し。大師とつてまいらせて候。三郎左衛門尉殿に候文の

ねはんぎよう

ごぶんにかん

もんぐご

ほんまつ

じゆけつしゅう

しやう

なかに、涅槃経の後分二卷、文句五の本末、授決集の抄の

じょうかんとう
上巻等、

ごずいしん
御隨身あるべし。